

(論文内容の要旨)

西洋中世スコラ神学者エカルドゥスにはドイツ語著作とラテン語著作があるが、これまで我が国で主に研究されてきたのはドイツ語著作、とりわけ説教であった。しかしドイツ語による著作はラテン語著作を基準にして編集されており、彼の思想を探究するためには、まずはラテン語著作を基礎に用いるべきなのである。本論文はそのラテン語著作からエカルドゥスの根本思想を解明しようとするものである。そして、現存するラテン語著作の大部分は『三部作』に属するのであるが、その内容はすべて第一部『命題集』の第一命題から説明されることが著者自身によって明言されている。従って、エカルドゥスの基本思想はこの第一命題に込められていたと考えられるのであるが、その第一命題とは「存在は神なのである (Esse est deus)」である。神を主語にして「神は存在なのである」という命題であればキリスト教思想の文脈では理解しやすいものであるが、エカルドゥスはあえてこのように転倒した表現をとっており、この命題には何か特別な意味が込められていたと推測できるのである。そこで本論文はこの第一の根本命題が「神は存在なのである」ではなく「存在は神なのである」とされる理由の解明を最終的な目的とする。

ところがこの命題を直接に説明していたはずの『命題集』の本文は現存しない。そこで代わりとしてケルンでの異端審問に際してエカルドゥスが遺した『弁明書』を利用するという迂回路をとらざるをえない。それは『弁明書』の冒頭で挙げられている三つの注意のうち、その第二の注意で言われている「一義的」や「アナログア的」の概念が、上記の主題にとって重要な意味を持っていると思われるからである。

そこで本論文では、次の順序で考察が進められる。まずエカルドゥスが言う「一義的」や「アナログア的」の基本的意味の解明から考察をはじめ(一章)、そこから被造物がアナログア的な意味で神を分有するということの特徴を取り出し(二章)、次に著名な始源論とアナログア論の関係の吟味からエカルドゥスの思考の原理的な

あり方を解明する（三章）。そして最後に、それまでの考察を踏まえて、上記の第一命題の意味を明らかにした上で（四章）、哲学史上の位置づけと評価を試みる（結論）。

一章「エカルドゥスのアナログア観」では、まずカエタヌスが挙げる帰属のアナログアと比例性のアナログアというアナログア類型を確認する。彼によれば、帰属のアナログアの具体例は「健康」という概念が動物、尿、食品のそれぞれに対する関係である。この場合、動物だけが本来の「健康」を持ち、それ以外の尿や食品は実際には「健康」を持たず、ただ様々な仕方で「健康」に関係している限りで、「健康な尿」とか「健康食品」と言われるに過ぎない。そしてこのとき、「健康」はアナログム、それを独占的に形相として持つ動物はアナログア首位項、形相としては持たずただ関係においてアナログムが帰される尿や食品はアナログア項と呼ばれる。もう一つの比例性のアナログアとは、概念のあいだに比例関係があることで共通の名前を持つものについて言われる。例えば「目を働かせること」と「知性を働かせること」の両方に同じ「見る」という概念が使われるように、「甲が乙に対するは丙が丁に対するが如し」という関係である。そしてカエタヌスはこの比例性のアナログアこそが本当の意味でのアナログアであるとしている（一節）。以上の確認の後に、論者はアリストテレスとトマス・アキナスのアナログア理解を概観する。アリストテレスが「アナログア的」と言う時、そこには比例性のアナログアと帰属のアナログアの両方が考えられていた。トマスは初期においては比例性のアナログアを支持していたが次第に帰属のアナログアへ変化したという理解が示される（二節）。これに対し論者によれば、エカルドゥスは初期の『パリ問題集』から最後の『弁明書』に至るまで、カエタヌスが言うところの帰属のアナログアで一貫しているのであるが、このアナログア理解を神と被造物に当てはめれば、神はアナログア首位項、被造物はアナログア項であるから、アナログムは神にのみ形相として存在することになる。すると被造物はそれ自体としてはアナログムを形相として持たないにもかかわらず、いかにしてアナログムに与るのかという疑問が生じることになるのである。

次の二章「アナログ的分有」において、論者は『弁明書』の中に見いだされる「すべての善人は一つの同じ善性によってアナログ的に善人なのである」というテキストを吟味し、これが「それぞれの善人にそれぞれ善性がある」とする考えの否定であり、結局は比例性のアナログの否定となるとする。エカルドゥスによれば比例性のアナログとは実はアナログではなく、一義的關係か多義的關係かのどちらかなのであり、究極的には神と被造物を一義的に理解する汎神論か、それぞれの神を個別的に理解する多神教になってしまうとされる。そうすると唯一可能なのは、ただ一つのアナログ項だけにアナログを独占させる論理であることになり、それがエカルドゥスの考えるアナログであるという解釈が提示される。そのことが鏡像の比喻によって示される。美女とその鏡像を例として考えてみると、アナログは「美」である。だがこの「美」を実際に形相として持っているのは美女だけであり、鏡はあくまでも美女を写す限りで「美」が述語づけられるに過ぎない。この関係を分析していくと、その根底には「範型と像」という形相を伴わない形相的な一致が基礎になっていることがわかるのである（一節）。鏡像の喩えは物質の次元に成り立っているアナログ的關係である。ところが同じ関係が「存在」とか「正義」とか「善」など物質でないものどもについても成り立つとエカルドゥスは言う。こうした精神的な次元でのアナログ的關係を示す典型例が「正義と義人の譬え」である。「正義と義人」の関係において大切なことは、「正義」が直接的に「義人」を生み出しているのではなく、両者をつなぐものが考えられていることである。すなわち「ラチオ」である。「ラチオ」とは「正義」の内にある「義人のアイデア」のことであり、「正義」はこの「ラチオ」を介して「義人」を生み出す。従って「正義と義人」の関係とは厳密には「正義とラチオと義人」の関係なのであり、「ラチオ」の次元での一義性こそ「正義」と「義人」をアナログ的關係たらしめる根拠だと主張される（二節）。こうした、アナログ関係成立の根拠としてラチオの次元での一義性を指摘するものこそ、『弁明書』の第一の注意である。すなわち「～である限りにおいて (in quantum)」という「重複の語法」とは、実は「ラチオの次元での形相を伴わない形相的一致」を示す論理だったのである。そし

て第一の注意の真の意味が明らかになると、『弁明書』の第二の注意も理解可能となる。本来は「顔」と「鏡」のように多義的關係であるものも、ラチオの次元での一義性を根拠にして、ラチオに還元される限りで、アナログア的關係として理解されるのである。論者によれば、それと同様に神と被造物というそれ自体としてはまったく異なるもの同士の間柄も、被造物がラチオの次元に還元される限りではアナログア的關係となるのである。

三章「アナログア的原因」では、神の側からの被造物への關係が吟味される。エカルドゥスによれば事物の本当の原因とは自然を超えたアナログア的原因である。そしてこうしたアナログア的原因を彼は特に「始原 (principium)」と呼ぶ。それを分析していくと、「始原」の中には本性を同じくするものが並立していることになる。ちょうど「正義と義人」の關係において「生み出している正義」と「生み出された正義」の両方が「正義」という始原にあるように、「始原」と「始原より生じたもの」が常に共にあるのである。そして「正義と義人」において真に大切なのは中間項の「生み出された正義」であったように、この「始原」においても、「始原」と「始原から作られたもの」を繋ぐ「始原より生じたもの」が理解の鍵だと主張される。さらに、「始原より生じたもの」とは知性であり事物のラチオであり、それもまた始原である。したがって、事物のラチオとは神が創造において懷いた觀念あるいはアイデアと考えられるのである（一節）。このようにエカルドゥスが帰属のアナログアとそれから論理的に帰結する始原論を基礎として思考していたことにもとづいて、『弁明書』の第三の注意の核心が「生むものと生み出されたものは、神における場合と被造物における場合で違いがある」という主張であったことが解明されることになる（二節）。そして、この見解の背景にあるのは「神においては一義性が保たれているが、神と被造物はあくまでもアナログア的關係である」という『弁明書』の第二の主張である。ところがその第二の注意そのものが第一の注意に基づいていた。したがって、エカルドゥスが『弁明書』の冒頭で挙げている三つの注意は全体が緊密な連関を持っていたのであり、その根本にあるのは「帰属のアナログア」であり、また、このアナログア理解が必然的に要請する「重複の語法」

だったことが再確認される（三節）。

「存在と神」と題された四章では、以上の考察を踏まえて、第一命題が「存在は神なのである」とされていたことの持つ意味が、『三部作への総合的序文』と『命題集への序文』で言われていることから解明される。『命題集への序文』で最初に注意されていることとは実質的に「重複の語法」であり、それは帰属のアナロギアから必然的に要請されるものであったから、『命題集への序文』も当然帰属のアナロギアを原理にしていると考えられる。帰属のアナロギアにおいては、実際にアナログムを形相として持つのはアナロギア首位項だけであった。従ってアナログムを「存在」とすれば、その「存在」はただアナロギア首位項である神が独占することになり、逆に被造物それ自体は「無」ということになる。すると被造物は神の存在に直接的に与っているのではないかという汎神論の疑いが必然的に生じることになる（一節）。そこで、エカルドゥスの神学に潜む汎神論的傾向について先人はどのように捉えていたのが、デニフレとエーベリンクを中心として検討される。二人ともエカルドゥスが結果としては汎神論を説いている事実は動かないと主張する。しかしエカルドゥスが自説に対して絶対の自信を持っていたことを勘案するならば、彼には汎神論だという疑惑に対して回答できる用意があったと考えられる。当然それは、神ではない被造物が持つ被造物としての固有性を強調することなのである（二節）。そこで、エカルドゥスが被造物の持つ固有性をどのように捉えていたのが検討される。その際注目されるのは被造物には二種類の存在があるというエカルドゥスの主張である。すなわち被造物の(1)神におけるあり方と(2)被造物それ自身におけるあり方、の二つの存在である。前者はラチオとしての知性や生命としてのあり方であるが、後者は外的なものとされる。神においてあるのはあくまでも「諸事物や諸形相の様々なラチオ」であり、事物としての事物が持つのは「形相」である。すると神において潜勢的、観念的にある形相のラチオが神の外で現実化したものこそ、被造物に固有の形相的存在なのである。この意味で被造物の固有性もまた、実は神のうちに観念的根拠を持っていることになると論者は論じる（三節）。以上のようにエカルドゥスの議論が帰属のアナロギアによって貫かれていることが確認された

ことから、最初に掲げたエカルドゥスにとっての第一命題が「神」ではなく「存在」を主語にしている理由が明らかにされる。エカルドゥスによれば、比例性のアナロギアでは被造物はそれ自体として存在を持つことになるが、これはアナロギア首位項が複数あるということであり、突き詰めれば複数の神を認めることになってしまうのである。そこで彼は神の唯一性を守るためにこそ、存在がただ神だけに帰属することを明らかにしようとしたのである。そのためには「神は存在なのである」ではなく「存在は神なのである」としなければならなかった。したがって、論者によれば、第一命題の「存在は神なのである」とは帰属のアナロギアによる限り必然的に要請される命題だったのであり、まさに帰属のアナロギアの図式を端的に象徴したものであったのである（四節）。

最後の「結論」で論者は、エカルドゥスの思想の根底にあったのが帰属のアナロギアであったことを再確認するとともに、汎神論だとの嫌疑についての評価を試みている。エカルドゥスは存在を神だけに帰属させることで神の唯一性を守ろうとしたのであるが、神だけに存在を帰属させることによって被造物の存在を全面的に神に依存させることになり、かえって汎神論を説いているような印象を与えてしまった。さらに、彼が理解するアナロギアとはアナログムの「あり方 (modus)」の違いによるものであり、そのあり方の違いとはアナログムが形相としてあるかないかの違いであると考えられていたのであるが、「あり方の違い」に「存在」まで含めてしまい、あらゆるものが「アナロギア的には神と一」と言えてしまうのである。その意味で汎神論との疑惑は避けられなかったというのが、論者の評価である。ただし、このエカルドゥスが抱えていた危険が同時にキリスト教信仰のあり方に新しい可能性を開いたこともまた認めねばならない。すなわち世俗の日常生活の中に神を見ることができるとする立場へと連なっている。その意味で伝統的キリスト教の立場からするとエカルドゥスは神学者として失敗したかもしれないにしても、生の教師としては不滅の業績を残したということは可能なのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は西欧13世紀末から14世紀初めにかけて活躍したスコラ神学者エカルドゥスの最も基礎にある思想を明らかにしようという試みである。エカルドゥスとは、我が国では「マイスター・エックハルト」というドイツ語名によってよく知られ、神秘主義者と見なされたり禅思想との関係で語られることの多い思想家である。しかし本論文でこの作家はあくまで「エカルドゥス」というラテン語名で呼ばれており、それは論者がこの思想家の根底にある思想をスコラ神学者として書いたラテン語著作に見いだしているからに他ならない。ドイツ語著作はごく少数が補完的に参照されるだけで、論者は基本的にはラテン語著作だけをその内部から読み解こうとしている。この角度からのアプローチは、我が国では中山善樹の業績を除くと、いまだ未開拓の状態にあり、本論文の特色はまずもってこの点に認められる。そこから、エカルドゥスと同じドミニコ会の先達であるスコラ神学者トマス・アキナスとの間の連続性と非連続性という、歴史的に重要な論点にも光を当てることになっている。

さらに、そのラテン語著作に見いだされる思想の理解において、自分の思想の根底をなすとエカルドゥス自身が明言している「存在は神なのである」という命題がどうして「神は存在なのである」ではないのかという問いを自ら立てて、その問いに対して答えを与えるための議論を積み重ねるという本論文の構成は論者に独自のものである。また、エカルドゥスのラテン語著作集には資料的な欠落という研究上の困難があるが、それを補いながらこの思想家の基本的な立場を明らかにするために、論者はエカルドゥスが晩年になって受けた異端の嫌疑に対して自分の見解を記した『弁明書』を分析し、それ以前の著作をその『弁明書』の立場から逆照射するという方法を取っている。これは、欠落があるというだけでなく相互に十分に整合的であるとは見えないエカルドゥスのテクストを目の前にしながら、そこに一貫した思想的立場を読み解こうとするときに有効な方法論であり、この点に本論文の第

2の独自性を認めることができるのである。

しかし本論文の最大の特長は、議論の中核をなすアナログア論の独自の解釈にあると言えるであろう。アリストテレスから引継ながらトマス・アクィナスがキリスト教神学者として使用した「アナログア」に関する理論は、神と被造的世界との間の関係をなんとか整合的に理解しようとするものであった。「神は善である」という主張と「パウロは善である」という主張において、「善であること」は完全に同名同義・一義的ではありえないのは、神が何らかの意味でパウロの善さの原因だからである。逆に、完全に同名異義・多義的でもありえないのは、そうだとすると善性に関して神と被造物とはまったく同一平面上にあることになり、神の超越性が維持できないことになるからである。そこで両者のいわば中間にアナログア的な関係が設定され、最も固有の意味で最大限に善性を持つのは神ではあるが、被造物もアナログア的に神に由来する善性を持つという調停がなされるのである。このようなアナログア論をエカルドゥスも継承しているが、アクィナスに残っていた不透明さを払拭する方向でアナログア論を徹底させたというのが、本論文の基本的な解釈である。そのことが「二章 アナログア的分有」では、被造物の側からの神のあり方の分有という角度から明らかにされ、「三章 アナログア的原因」では反対に神の被造物に対する原因性の角度から吟味される。エカルドゥスにおいてアナログアとは常に一義性を秘めているものであり、被造物を被造物として見る観点と神におけるラチオとして見る観点とは並立するとされており、これによって「被造物がそれ独自の存在を持つ」ということと「あらゆる存在は神である」という二つの主張が両立可能だと見なされている、というのが論者の解釈の要点である。この見解が正統的なキリスト教教義に反する汎神論の嫌疑を受ける可能性のあることを了承しながらも、論者はエカルドゥスの思想がむしろ神の超越性と唯一性を保持しようとするものであったことを強調する。そして、このような解釈を前提にして、エカルドゥスにおいて「神は存在なのである」ではなく「存在は神なのである」が第一の基本命題とされたのは、被造物を神におけるラチオとして見る観点の優位からの必然的帰結なのだという一貫した議論を本論文は提示し得ているのである。

このように本論文が、一見したところ茫漠としたものに思えるエカルドゥスのラテン語著作にアナログア論という視座から光をあて、その根本的立場を整合的で一貫した理論として再構成している点に、我が国だけでなく広く内外のエカルドゥス研究に対する重要な貢献を認めなければならない。この一貫した再構成の作業はいわば骨太なものであり、いくつかのテキスト解釈においては微細な瑕疵を含むものとなっている。また、エカルドゥスの思想を裏側から支えているのは神の内部の三位一体に関する立場であると思われるが、その点にもう少し目配りをして踏み込んだ議論を加えたならば、神とその外なる被造物との関係に関する論者の解釈もより深められ豊かになっていた違いはないという思いを抱かざるを得ない。しかし、本論文に対するこれらの不満の思いは、本論文のなした貢献の意義を認めることを躊躇わせるものではないのである。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年8月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。